

賀川豊彦「の」問題

波勢邦生

賀川豊彦には瑕瑾がある。その時代性と功罪——差別発言、戦争協力、天皇制擁護——という問題を克服し、歴史化せぬまま「賀川豊彦」を都合よく語っても、彼を現代には活かせない。「近代日本とキリスト教」という俎上で、彼を如何に再評価・理解できるのか。以下、研究の資料と方法に関する基礎的考察を行う。

資料の限界

資料については限界があることを認めねばならない。問題点は二つある。第一は、現在入手可能な全集は不完全なものであり、全集の編纂・編集に明確な改変があること。第二は、未発表・未発見の資料が相当な量、想定できることである。

第一の問題について、賀川研究者で「イエスの友会」を継承した黒田四朗いわく1964年の全集出版の際「手許にあった資料は実際に全集にまとめられた二十四冊分より十二冊分も多くあった」¹。従って全集は全著作の六割強程度を収録したものに過ぎない。たとえば「神の國新聞」²などは全集に収録されていない。12冊分が未刊行となった理由は、出版元である当時のキリスト新聞社・社長の武藤富男（1904-1998）が全36巻の完成を待っていないことは出版できないこと、かつ売り上げも見込めないもので全24巻の刊行を決定したからである。加えて、この武藤富男が全集出版時に、原文からの改変・編集・編纂を行ったことが近年明らかとなった。

賀川が高談雄弁、多筆多作の人であったことは周知の事実である。手書き原稿に、一時間で原稿用紙4、5枚を書いたという証言もある。賀川の周囲には常に秘書や筆記係が数名いて、講演などを書きとり、賀川が後にそれを確認修正して出版するという体制が整っていた³。従って、賀川が口述した内容が記録係によって文書化され、賀川によって再度確認修正されたものが原資料となる。しかも書記となった人物は、黒田が名前を挙げるだけでも13名に渡り、秘書にいたっては数十名いたという⁴。それが全集に掲載される場合は、武藤による編集・編纂の可能性を加味せねばならない。ほとんど聖書学にも似た文献学的課題を賀川豊彦研究は抱えている。

現在、賀川豊彦記念 松沢資料館が中心となって、この問題を解決すべく、原資料と収集可能な資料を基礎にした新しいデータベースを構築中であり、近い将来には公開されると思われる。従って本稿は、現状入手できる不完全な資料に立脚したものであることを申し添える。

第二の問題は、未発見・未収録の資料である。発見されてから考えればよいと思われる問題であるが、問題は、既に発見されていることである。論者が地元で教会を訪ねた際⁵、賀川研究に携わっているということを述べたら会堂物置に案内されたことがある。そこには賀川筆の掛け軸、イラスト付の聖句などがあつた。即ち、賀川が全国を伝道者として行脚した際に、行く先々で多くの教会や人々に一筆ふるった内容やメモ、手紙、イラストなどが未だ一般に知られることなく、むしろ忘れられたまま無数に存在している可能性がある。既知の資料でありつつも手付かずの資料が、未発見・未収録のまま、全国の教会や家庭、また海外において、おそらく相当な量で存在すると考えるのはあながち間違いでない。

資料の全体像

では現時点で確認可能な資料はどのようなものか。黒田は賀川の著作範囲が「教育と宣教と福祉にわたる働き」であるという。黒田の分類によれば、賀川著作は単行本で全 164 部、宗教書類 62、論説 35、文学 43、翻訳書 24 である。彼が「このほか自らが責任をもって発行していた「雲の柱」「火の柱」「世界国家」「農村」、他で発行していた「労働者新聞」「湖畔の声」「日曜学校の友」「教会学校」「家の光」「日曜世界」「母の光」その他無数の月刊雑誌などに発表した文章は莫大な数に達している」⁶。

第一分類「宗教書類」は伝道書であり、伝道書は、神学書、聖書解説書、信仰解説書、宗教教育書、祈祷解説書、随筆の 6 種に分類可能である。第二分類「論説」には、資本主義とマルクス主義の弊害に対抗するために著した『主観経済学の原理』、暴力革命への反対を表明した『生存競争の哲学』が含まれる。後に物議を醸すこととなった『貧民心理の研究』、また賀川晩年の主著『宇宙の目的』属している。第三分類「文学書」は、創作 28、詩集 5、随筆 5、童話 4、和歌集 1 という内訳である。日本で初のベストセラー『死線を超えて』が、これに含まれる。第四分類「翻訳」には、ジョン・ウェスレーの信仰日誌など信仰的著作から科学、歴史、法律、動物に関する訳書が並んでいる。

賀川の実践活動の結実としてのこれらの著作類が、結果的に印税と原稿料という形で彼の活動を支えた。たとえば賀川原稿料は「四百字詰一枚二十円」であり、当時の文学第一人者たる菊池寛と久米正雄と同額であった。単行本のうち、宗教書類 11、論説 2 を十銭本または十銭文庫（現在の貨幣価値で約百円）で販売したことも功を奏した⁷。当時、全集一冊が一円（約千円）の時代に破格の値段で、宗教書を販売したことが、大衆伝道者・賀川豊彦の知名度を確立し、彼の教育、宣教、福祉にわたる活動の継続性の基礎となった。

資料の扱い方

賀川の残した資料は膨大な量になる。そしてその資料の限界と範囲は先に述べた通りである。従って、現状では現行の全集に頼るほかない。次に問題となるのは資料の取り扱い方であるが、便宜的に、1. 単行本、2. 雑誌記事、3. 公開された講演録、4. 身辺雑記などの手記・メモと優先順位を決めて扱いたい。単行本は本人が推敲丹精して世に問うたもの

であるので、その思想を見るのに一番良い形である。

雑誌記事の類は、一定の目的に沿って書かれたものであり、その内容に則して理解せねばならない。講演録は、本人の修正と確認があるにせよ、多少の編纂過程を経ていることを鑑みるべきである。身辺雑記などは雑誌「雲の柱」に公開されたものであるが、行動記録と報告、覚書の要素もある。この資料間の価値の勾配が大きなものであるとは思われない。なぜなら資料に反映される賀川が、メディアを駆使して生きた大衆伝道者・賀川豊彦その人だからである。

賀川豊彦の実像、「本当の賀川豊彦」ということを確定することは困難であると言わざるを得ない。むしろ研究成果から立ち上がる複数の実像の絶え間ない更新こそが、故人となった「賀川豊彦」を理解する方法であろう。

「の」問題 8

では賀川豊彦「の」神学、その自己理解を理解するためには、何が必要なのか。「近代日本のキリスト教」「日本の神学」「日本的キリスト教」を巡る「の」問題を踏まえ、近代日本とキリスト教を並べて研究するに際して、「の」問題を避けて通ることはできない。以下、先行研究に沿って述べる。

芦名定道によれば「「アジアのキリスト教」あるいは、「日本のキリスト教」と言う場合の「の」の問題であるが、この「の」を、主格、目的格、与格、奪格のいずれにおいて理解するかをめぐって、北森嘉蔵、大木英夫・古屋安雄、森本あんりの諸氏が、それぞれ議論を展開している」⁹。端的に言えば「日本的キリスト教とは何か」という問いである。

芦名は、先行研究における議論を踏まえて「「の」に関して、主格、属格、与格、対格、奪格の複数の視点が分析できることは、十分に確認できた……「アジアのキリスト教」の研究はこれらすべての視点において可能であり、またそれらを必要とする」¹⁰とし、共通項を二点確認している。「日本のキリスト教」研究の共通項の第一は、明治期以降のキリスト教においてみられた「日本主義・民族主義への過剰な同化を避ける」ことであり、第二は、地理的事由を超えた「積極的な意味が求められる」ことである。芦名は、この共通項を土台として、歴史的 개념としての「アジア」を深めた議論の必要性を問う。即ち、あまりにも「日本」が自明の事柄として語られ「てきた現状に注意を促し、その実例として新渡戸、内村の武士道理解、接ぎ木論などに言及している。

では「の」問題は、如何にして賀川豊彦研究と関わるのか。加山久夫は、賀川の再評価を巡って、賀川評価のアンビヴァレント性、賀川研究の方法論的問題について指摘した¹¹が、上掲「の」問題に沿って議論を整理すると以下ようになる。

即ち、賀川豊彦研究は、大木・古屋「対格の」神学から言えば、賀川豊彦「を」教会的神学から批判的に検証することである。北森「属格の」神学では、賀川豊彦「の」神学的内容の学究となる。森本の観点を踏まえれば、賀川豊彦「が」誰「に」語ったのか、を主題化する「主格・与格の」研究が可能であり、賀川豊彦から「奪格の」神学を構築するこ

とになる。芦名が提示した総合的観点から言えば、これらを包括した上で、神学的主体の前提である「日本」の歴史性・複合性・複数性を、「アジアの」枠組みの中で改めて検証するという形になる¹²。従って研究の出発点に「アジアの賀川豊彦」という補助線を引く必要がある。おそらく、賀川の意味世界における宇宙、世界、教会と国家、アジア、東アジア、日本の関係構造を明らかにしていく作業が必要になる。

「アジアの賀川豊彦」という補助線¹³

芦名は上述した議論ののち、北森によって新渡戸、内村がその実例として挙げられた土着化論を再考し、ピエリスの土着化神学批判を追っている。論点は三つ、第一は「土着化論と解放の神学」、第二は「古代イスラエル史の規範性」、第三は「接ぎ木と相互変革」である。その上で H.G.ガダマー解釈学の「地平」「地平融合」概念を導入しまとめている。

論点の第一、土着化神学批判について、芦名は「武士道的キリスト教は「日本のキリスト教」を語るのに適切だったのか…土着化神学は文化のどこに定位しているのか」¹⁴と問いかけている。賀川豊彦に関連させるならば「アジアの賀川豊彦」「賀川豊彦のキリスト教」は、アジアのどの文化を歴史的・複合的に継承し、キリスト教のどんな社会階層と関わり、何を反映していたのか、という問題である。なおピエリスの主張に鑑みれば、賀川を「解放の神学」の一翼として見なすことは可能である。これについては短く後述する。

芦名は続けて「アジア」から「キリスト教」へと論点を移す。第二の論点、森本が指摘したアジアの複合性・複数性に対する「古代イスラエルの規範性」である。なぜなら「古代イスラエル宗教文化におけるキリスト教の成立は様々な歴史的文脈でキリスト教が土着化する際の原型」¹⁵だからである。キリスト教が分かち難く結びついた古代イスラエルという基礎的土台、この土台との距離と類比の理解が、土着化したキリスト教のかたちを形成する。芦名は、古代イスラエルの規範性を拒否した実例として「ドイツ的キリスト者」「海老名弾正」を挙げていう。「古代イスラエル史は、キリスト教のデーモン化・逸脱に対する外的な批判基準——これはしばしば「正義」と表現される——なのである。」¹⁶

言いかえれば、ことばとして幾らキリスト教用語を使っている、その内実が「キリスト教のかたち」から離れて民族主義になっていけば、それは逸脱と言わざるを得ない。

賀川研究との関わりでいえば、賀川の瑕瑾、その時代性と功罪——差別発言、戦争協力、天皇制擁護——に通底する「民族主義」という問題を克服するための理路がここにあるように思われる。即ち、現代的観点から賀川豊彦を批判するだけではなく、賀川思想・実践の内的構造から「賀川豊彦と日本」の距離を測るために彼の旧約聖書・ユダヤ教の理解を解明する必要がある。つまり、アジアの歴史性だけではなく、キリスト教の歴史性としての古代イスラエル史理解が、どこまで自覚的に賀川の聖書解釈と意味世界に存在したのか。この問いが、賀川の「日本」性を浮き彫りにする方向である。

論点の第三は、土着化を論じるためのイメージの問題である。「接ぎ木」という用語がはたして「日本」や「アジア」とキリスト教との間に成立する相互変革の可能性を十分に捉

え得るか」¹⁷。芦名は、相互変革を積極的に論じる J.B.カブの仏教とキリスト教の対話について紹介している。宗教間対話が「自己変革の深化を通して相互変革に進み、そして、共通の何か——ピエリスならば、貧しい者の解放——を目指し、共有可能なものを構築すること」¹⁸を指摘する。賀川研究に翻せば二つの問いになる。一方は、賀川豊彦が、自身の日本性を基盤にして仏教を含む他宗教との対話の中で、いかなる変革をキリスト教にもたらそうとしたのか。他方は、その自他の相互変革の先に何を見ようとしていたのか。これらの問いの中で、賀川の功罪を扱えば、賀川の自己理解に沿った適切な批判を行うことが出来るよう。

まとめ

上掲議論を踏まえて、芦名は H.G.ガダマーの「地平」「地平融合」「問いと答えの論理」¹⁹を援用し、J.ヒックを手がかりにして述べる。「アジアのキリスト教」が、アジアの伝統的な宗教文化の地平とキリスト教の地平との有意味な融合であるとするならば、そのためには、この「問いとしての宗教」「問いの共有」——あるいは「問いの類似性」——から議論を始めることが必要なのではないだろうか。²⁰

賀川研究に返せば、キリスト教と日本という「地平」において、賀川豊彦はどのような動態を示したのか。そして賀川豊彦において、二つの伝統が新しく解釈されたとしたら、そこで起きた「地平融合」の内実とは何だったのか。賀川豊彦の神学が有する対話可能性、多元性は、他宗教とどのような「問いの類似性」を持ったのか。

この「問いの類似性」が、賀川の同時代性と歴史性・地理性との結節点となり、この結節点を定位することが、賀川豊彦再評価への第一歩となるだろう。即ち、「アジアのキリスト教」という研究対象を、その対象の解釈学的構造に即して、複数の地平と地平間の融合において研究すること」²¹が、キリスト教の本質的事柄である「聖書解釈」の問題と密着している。従って、ここに「賀川豊彦の聖書解釈」を論じる理由も求められる。なぜなら神学は聖書解釈の表現に他ならないからである。賀川豊彦の神学とは、賀川において起きた「地平融合」の内実である。即ち、「地平融合と相互変革はいかなる自己を生み出すか」という問いである。

仮に賀川豊彦において「近代日本とキリスト教」「仏教とキリスト教」が地平融合しているならば、その結果として生まれた新しい地平の自己同一性とは如何にして可能なのか。「生成する自己の多元性や内なる他者の問題」²²連関はどうなっているのか。つまり、多元性と他者性を含む賀川豊彦の自画像はいかにして形成されたのか。その自画像が、どのようにキリスト教の本質形成に寄与すると彼は考えたのか。以上が土着化論を巡る議論との連関で「アジアの賀川豊彦」を問うための基礎的考察である。

1 黒田四朗『私の賀川豊彦研究』キリスト新聞社、1983年、102頁。

2 『神の國新聞』全4巻、緑陰書房、1990年。

-
- 3 黒田、前掲書、120 頁。
- 4 同上、120-125 頁。
- 5 2014 年 8 月 17 日、日曜日 児島聖約キリスト教会にて確認。
- 6 黒田、前掲書、102 頁。
- 7 同上、116 頁。
- 8 芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性 二つの地平が交わるころにて』三恵社、2016 年。本節は、同書の第一部の議論に依拠している。
- 9 同上、9 頁。
- 10 同上、8-15 頁。
- 11 加山久夫「日本キリスト教史における賀川豊彦～再評価は可能か～」『雲の柱』（賀川豊彦記念 松沢資料館）27 号、2013 年、22 頁
- 12 金井新二の研究（前掲書）は、賀川理解のために非常に重要である。雨宮栄一『貧しい人々と賀川豊彦』新教出版社、2005 年、249-250 頁を参照。
- 13 芦名、前掲書、15-41 頁。
- 14 同上、20 頁。
- 15 同上、20 頁。
- 16 同上、23 頁。
- 17 同上、23 頁。
- 18 同上、25 頁。
- 19 同上、26-32 頁。
- 20 同上、31 頁。
- 21 同上、32 頁。
- 22 同上、33-34 頁。